Meeting and Greeting Like Shadows

進藤詩子　Utako Shindo

遊工房アートスペースのなりたち

遊工房アートスペースは、1980年代より美術教室、彫刻アトリエ、アニメーション・スタジオなど、様々な美術活動の「場（スペース）」となりました。1950年代から80年代までは、診療所兼結核療養所として使われていましたが、時代の変遷と共に姿を変えました。1989年より海外アーティストの受入開始、2001年さらに活動を充実させるため、主として現代美術の発信を目的とするギャラリー、創作スタジオ及び滞在施設を備えたアートの複合施設として生まれ変わりました。グローバルなアーティストとの交流や、地域に根ざした芸術活動の場となり、同時にアーティスト・イン・レジデンスも本格化し、着実に歩みを重ねています。

2020.12.26 Youkobo, Tokyo

リンダ・スワンソン「影の方へかがみこみ： のびゆく のこりゆく 線は」より抜粋

… 先日zoomを通してスタジオ訪問をさせてもらった際に、詩子は磨りガラス窓を通して浮かんでいた木々の姿を窓を開けて私に見せてくれ、それがモクレンの木の冬の風にねじれた枝であったことがわかった。その下に広がる中庭では、幼い少女が祖母と共に時々遊んでいるのだと彼女は教えてくれた。祖母は子供の遊び机の上に身をかがめて一緒に絵を描いていることがあり、その幸せそうな様子が彼女のいる上の階にまで上って伝わってくるらしい。彼女は私自身がその時の様子を“見える”ようにするためか、あるいは単に彼女自身がその喜びを体現しようとしてか、自ら低くしゃがんで、想像上のその情景へ体をおりまげて前方へかがみ込み、満面の笑みを浮かべて見せた。そうしてそれを見て伝染するように私もまた、笑顔になった。このように、私達の身体は外界を収集し、表現し、経験するのための集約する器となる。もし身体が彫像のような一塊りの物質にすぎないならば、そんなことは可能になりようがない。今回の展示『*Meeting and Greeting Like Shadows*』[1]におけるインスタレーションでは、低いスツールの上にドローイング作品が数点設置されている。彼女によると「微妙な光がその上をうつろうように」、さらにその上を私達が近寄ってかがみこみ、作家の制作時の姿勢をとって見ることが可能になっている。「低い姿勢のままで…座ったり、かがんだりしながら見ると」と詩子が自ら実際にやってみせ、「親密な間を保つことができる」と示したままに。

… 進藤はその空間に対して、光、空気、時間といった天候の条件に加え、その場の歴史の記憶の気配をも鋭敏に察知していた。治療と回復のための建築であるサナトリウムとしてその構造は造られていた。（幾分皮肉なことに、結核はアーティストに縁の深い、クリエイティブで繊細な精神が罹りやすいとみなされていたものだが。）彼女はしばらくの間そんなエピソードの投げかける影にも反応していた。このかつては診療所の寮の中では、彼女は落ち着かない時もあったが、休息しながらじっと観察をしているうちに「この建物は人々を治癒する目的の施設であった」ということを実感したのだった。さらには、工房の近くにある大きな池によってもたらされる大気と光の効果によって、近隣一帯のすみずみまで清められるような気配が充ちているということにまで、彼女の話はひろがっていった。磨りガラスの窓、紙の白さ、建物の歴史、あたりを潤している水分。ここでスクリーンとして映し出すものたちは、光り輝く境界と同時に、多孔質の隙間を差し出している。墨の寄せて触れてゆく線の、表面を渡ってゆく運動を、彼女自身は影と名付けたが、それを登記しつづけるところのドローイングとは、見ることと見ないことの間の、また、記憶することと忘却することの間の閾である。

肺のX線画像において影は疾患を現すが、絵画においてはその起源だという。恋しさのあまりに愛する者の影をなぞり残されたものがはじまりであるというのだ。肉体という物質的実在から生まれ、時間と空間においてそれ自身を超え、その先へと長く遠くへ伸びてゆき、過ぎゆくものや消えゆくものを記録するという痕跡であるもの。すなわち影とは投影されたもうひとつの存在である。自分自身の肉体を超えた存在の証しである。すなわち影とは肉体に宿った存在と外界との間の継ぎ目で現象するものである。…

[1] 芸術家アグネス・マーティンへの敬意を表し、進藤はマーティンの詩：『友人と私』（新聞紙 『*El Crepúsculo De La Libertad*』（ニューメキシコ、タオス発行）に1958年9月11日付で掲載）の中の「…私たちは影と影が出会い、挨拶を交わすように、出会い、挨拶を交わす（…We meet and greet like shadows meet and greet…）」をパラフレーズして今回のタイトルに使用している。

The Origin of Youkobo Art Space

Youkobo Art Space houses its facilities and operates its programs within a building complex that was originally a medical clinic and sanatorium for tuberculosis patients from the 1950s to the 80s. After the clinic closed, a section of the property was used as a home-stay style residence for foreign artists and researchers, while another section was home to an animation studio and art class for the local community for nearly two decades. These spaces were refurbished in 2001 to officially become Youkobo Art Space. Youkobo Art Space has since facilitated a broad range of artists' activities through an Artist-in-Residence and Gallery programs, providing artists with important resources that benefit their artistic goals.

2019.9.25 FVA Southwest, Santa Fe

Excerpt from “Bending Over Shadows: lengthening and lingering the line“ by Linda Swanson

… On our recent zoom studio visit, Utako showed me the filtered shapes of trees on the frosted glass windows, which she then opened to reveal the twisting winter limbs of a Japanese magnolia tree. In the courtyard below, she told me, a little girl often plays with her grandmother who is sometimes bent over the child's play-table to paint with her, their happy sounds drifting up. As if to help me “see” this, or just for her embodied joy of it, Utako then performed a low squat and folded forward over an imaginary scene, a huge smile spreading across her face, and by contagion, mine. Here, the body becomes a focused concavity to gather, and then express, experience. Nothing will get by that scoop of torso. In this installation, *Meeting and Greeting Like Shadows*,[1] Utako has placed some of the drawings on low stools “so that the delicate light can sift over them,” and over which she invites us to bend closer, reperforming aspects of the maker's posture. “Keeping low... by sitting or folding,” Utako demonstrates, “maintains the intimacy.”

… Shindo is sensitive to the room as a weather of conditions—light, air, time—and a climate of its history: the structure was built as a sanitorium, an architecture of care and recuperation. (Somewhat ironically, tuberculosis was associated with artists; consumption pathologized the vulnerabilities of a sensitive creative spirit.) Shindo has been responsive to the shadow cast by that episode, too: in this former clinic dormitory, she has performed restive/resting observations of light and recognizes “that this building is meant to heal people.” She refers even to a large pond close by whose effects on air and light in the entire neighborhood suffuse a cleansing atmosphere. Screens (frosted windows, the white of the paper, the history of the building, atmospheric moisture) offer both luminous boundary and porous escape. The drawings, which register linear washes as movement across surface and which she names as shadows, are thresholds between seeing and unseeing, remembering and forgetting.

On a lung x-ray, a shadow is disease, and painting, the story goes, was invented by a shadow-inspired longing (love sickness)—tracing the lover's shadow as they left. A mark originating in the physical fact of a body but reaching beyond it in space and time, lengthening away, recording the passing and disappearing, a shadow is cast. It is a proof of existence beyond one's own body; a shadow happens at the seam between an embodied existence and the world beyond. …

[1] In a “bow” to artist Agnes Martin, Shindo paraphrases from Martin's poem “My Friends and I”, as printed in El Crepúsculo De La Libertad (Taos, NM), Sept. 11, 1958: “...We meet and greet like shadows meet and greet...”

愛を持って芸術のために遊ぶ

進藤詩子

2021.2.5 Zempukuji Pond, Suginami

2019.6.20 Santa Fe River, Agua Fria

2019年の春、私はニューメキシコ州のタオスに赴き、町の中心にあるアドビ煉瓦の古い建物を訪ねた。現在はおもちゃ屋が入るこの一角に、かつてはアグネス・マーティンのスタジオがあったという。店員が通してくれた奥の小さな部屋には、空色の壁と木の床、杏の木が見える窓、採光用の小さな天窓と、絵を描くのに理想的で親密な空間があった。そして外看板の一枚には「PLAY」のカラフルな文字。マーティンがここで制作した7枚の連作が、近隣のハーウッド美術館の専用展示室で今も見ることができるのだが、その1枚に偶然にも《Playing》という副題が付されていたことを思い出す。隣り合う白と青の細い縞模様が数本、ライトブルーの画面全体に控えめな立体感を与えつつ、微かな躍動感をもってゆっくりと走る様が印象的だった。

それからの1年、同州に長年暮らしたマーティンの足跡を作り手の視点から辿った。どんな心持ちと態度で日々を生き、制作に向き合うことで、観る者の心に静かに触れ、永遠の余韻を残す作品が生まれるのか。そう問いながら過ごした当地での日々に得たヒントを額りに、帰国後も東京で実践を続けた。マーティンや彼女に続く作家らの声に耳を傾けつつ、私なりのテーマ〈翻訳不可能なもの〉に引き寄せた「問い」が深まりはじめた頃、遊工房アートスペースで制作し発表する機会が巡ってきた。暮らすことと作ることが密接に結びついた「遊工房＝Workshop for「PLAY」。ロゴの「遊（You）」の字に潜むカタツムリの弛みない歩み。「どんなふうに線を引いたら、ドローイングは影になるのか」、そう問うのに、これ以上ない「場」だと感じた。

私のアメリカでの活動拠点は、州都サンタフェにある芸術家リンダ・スワンソン氏のスタジオ兼住居（通称 Forde Visser Archive（FVA）, Southwest）にあった。近年LAに越されるまで、リンダさんが長年暮らしたその「ホーム」は、村田ご夫妻宅に隣接する遊工房のことを私に思い出させた。そして、定評ある芸術家/教育者でありながら同じ目線で若手作家を応援するリンダさんの気さくな笑顔は、芸術家スピリットで様々な芸術活動の「場」を創造してきた弘子さんと、幼少期から今日まで芸術家と共に暮らし作家支援の情熱を絶やさない達彦さんの、二人の飾らない笑顔と重なるのだった。今回の遊工房での活動において、遠隔地からエールを送り続けてくれるリンダさん、コロナ禍による非対面コミュニケーションの中でも最良の制作環境を整えてくだされる村田ご夫妻、彼/彼女らの「温かな影」は、私自身だけでなく、私の作品にも温もりを与えてくれている。

時折、制作へのヒントとして、「スタジオ内の静寂を保つことが重要だ」というマーティンの教えを、彼女を良く知る作家が私にも伝えてくれたことを思い返す。そして、マーティンの作品の静謐さと時空的広がりを初めて体感した時、潜在する生命力のような、或いは輪郭のない影の揺らぎを、作品から受容した感覚が蘇る。彼女の「静かなスタジオ」には、音を立てずに躍動する「命」や「インスピレーション（霊感）」が密かに充満していたはずだ。

そしてそれらは、FVAや遊工房にも溢れている。FVAにはリンダさんとご主人で彫刻家のエドさんが育てた小さな果樹園があり、香りに誘われ鳥やリス、ウサギやコヨーテの親子がやってくる。敷地脇には、雨や雪に恵まれると、サンタフェ川が近隣の山から流れ降りてくる。このアグア・フリア（冷たい水の意）一帯は、スペイン入植時代に灌漑が整備され、かつては先住民の製陶所も点在した。遊工房にも都会のオアシスなる緑生い茂る庭があり、大小様々な生き物が憩い、向かいの小学校の子供らの声が木霊する豊かな空間が広がる。これらは渾然一体となって命やインスピレーションを私に送り込む。そして1日の終わりに、スタジオの前から伸びる緩やか坂道を降りると、遅野井の湧き水が満ちる善福寺池に行き着く。澄んだ空気を吸い込んで目を閉じると、黄昏時にサンタフェ川沿いをよく歩いたことを思い出す。漆黒に染まる前、辺り一帯が青い影に覆われると、私は肩の荷を降ろして空っぽになり、まっさらな心地で泳ぐようにして漂った —— かつてそこが内海であった頃のように。その感覚は、今回の作品にも「息」継がれているように感じる。

西海岸に暮らした若き日のマーティンは泳ぎの名手だったという。そして92歳の死の直前まで制作を続けた彼女は、シャイだが愛情に溢れた人として友人らに記憶されている。彼女はまた、大変な子供好きだったという。スタジオの裏庭にプールを掘り、夏季には毎日集って遊ぶ地域の子供らを、静かに見守っていたそうだ。その心には、彼らの「無垢さ」を自らの中にも育みたい気持ちもあったようだ。ある美術史家が指摘するように、それはナイーブでセンチメンタルな意味ではなく、既存の枠を超えて「比類なきものになりうる」ようなラディカルな自由さ、つまり芸術に「遊ぶ」ために必須の要素としての「無垢さ」である。

マーティンの足跡を辿る中で触れた彼女の「愛情」や「無垢さ」を、私はFVAと遊工房にも感じている。それらは、真に自由な営みとしての芸術に向けられた確かな「思い」であり、作り手を通して作品に流れ込み、そこに永遠に宿る「命」となる。だから私達は、真に創造的な作品、言わば「生きた」作品と出会う時、自らの心（の臓）が応答するのを感じ、またそれを新たにできる。マーティンの作品が今もなお静かに深く呼吸し続けていると感じるのも、この為だと言えないだろうか。そしてリンダさんとエドさんのサンタフェの「ホーム」にも、達彦さんと弘子さんが二人三脚で歩み育ててきた「マイクロレジデンス」にも、控え目だが確かなリズムを刻む「命」が息衝いていることを、私は感じずにはいられない。それは微かに揺れる影のように、私の中にそっと浸透し、紙面に引かれる線の一つ一つに、ゆっくりと息を吹き込む。

Playing for art, lovingly

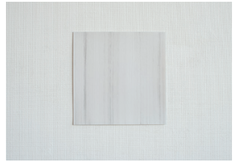
Utako Shindo

In the spring of 2019, I went to Taos, New Mexico and visited an old adobe building located in the town center. Where there is now a toy shop, used to be Agnes Martin's studio. A shop clerk led me into the small room at the back. It had a sky blue-colored wall, wooden floor and a window overlooking an apricot tree; together with a small skylight these features provided an intimate space ideal for painting. The word "PLAY" was written on one of the outdoor signs in colorful letters. It reminded me that a series of Martin's works, consisting of 7 paintings, was made here and is permanently on display in the special exhibition room at the Harwood Museum of Art nearby; by coincidence one of them was subtitled "Playing." Fine blue and white lines formed a striped pattern and evoked slow, vigorous movements, giving a subtle depth to the surface painted in light blue, which impressed me.

During the next year, I followed the path of Agnes Martin who had lived in New Mexico for a long time. From my own perspective as an artist, I tried to explore in what state of mind or attitude did she live and work so as to create works that quietly touch the hearts of viewers and leave eternal impressions? Based on the materials I gathered during my stay there, I continued working after my return to Tokyo. When I started to incorporate what I had learned about Martin into my original interest in 'the untranslatable', I looked for a way to respond to the voices of Martin and her successors and was offered an opportunity to create and present my work at the Youkobo Art Space. The word 'Youkobo' in Japanese means a workshop for 'PLAY,' where life and the act of creation are closely entwined. Their logo with a snail implies slow but constant movement. I thought I couldn't find a better 'space' to explore my question: how should you draw a line, and how does drawing become shadow?

In the United States, I was based at artist Linda Swanson's studio-cum-home (commonly called Forde Visser Archive, FVA, Southwest) in the state capital, Santa Fe. The 'home' Linda lived in for years until she recently moved to LA reminded me of the

Installation view, Youkobo Studio2



.. and a white line, sumi ink on paper, 253×253mm

Youkobo which was located right next to The Muratas' residence. The cheerful smile of Linda, who though being an acknowledged artist/educator, worked with and supported young artists, made me think of Hiroko's relaxed smile whose artistic spirit led her to provide the 'space' for various art activities. And also Tatsuhiko who had lived with artists since his childhood and always showed great enthusiasm in supporting their work. My current project at the Youkobo owes so much to Linda's spiritual support regardless of our distance and the optimal environment provided by the Muratas, despite no face-to-face communication due to the Covid-19 crisis. Their 'warm shadow' not only encourages me but also adds ardor to my work.

Sometimes, I think of Martin's maxim which was told to me by an artist who had known her personally: "It's important to keep the studio silent." I remember the sensation I received when I first experienced the tranquility and feeling of expanse in Martin's work—something similar to latent vitality or a wavering shapeless shadow. Her 'quiet studio' must have been filled with silent but vibrant 'life' and 'inspiration.'

These qualities also permeate both the FVA and the Youkobo. The FVA has a small orchard looked after by Linda and her husband, the sculptor Ed and its smell attracts birds, squirrels, rabbits and a parent coyote with its offspring. Next to the compound, when it rains or snows, the Santa Fe River brings water from the nearby mountains. In this Agua Fria (meaning cold water) area, irrigation was developed under Spanish colonization and there used to be several potteries owned by indigenous people. The Youkobo also provides an urban oasis with its garden covered by thick green foliage where many kinds of animals come to rest and children's voices from the elementary school opposite echo. Together, these things all give me life and inspiration. When I walk down the gentle slope in front of the studio at the end of the day, I arrive at the Zempukuji Pond where natural spring water from Osonoi wells up. As I close my eyes and breathe in the clean air, I remember the time I used to walk along the Santa Fe River at evening twilight. As the whole area became covered by blue shadow just before the pitch-dark air fell, my mind relaxed, felt completely empty and renewed, and I floated in the air as if swimming a long time ago when there was an inland sea there. This sensation is also palpable in my current work.

When she lived on the West Coast in her youth, Martin was very good at swimming. She continued producing art until just before her death at 92 years old; her friends remember her as a shy but loving person. They also remember that she loved children very much. She made a swimming pool in the backyard of her studio and in summer she used to quietly watch local kids who came to play every day. She probably felt a longing for their 'innocence.' As an art historian suggests, 'innocence' here means more than a mere naive, sentimental quality; it is foundational in pursuing radical freedom which allows you to go beyond conventions and become 'unsurpassable'; in other words, to 'play' in art.

I discovered 'love' and 'innocence' by following Martin's path; I find them both in the FVA and the Youkobo. These are a token of people's 'belief' in art, especially as purely free endeavor, which suffuses artwork through the artist and finds eternal life there. In this way, when encountering truly creative works that are 'alive', we feel our hearts respond and become renewed. This could be the reason why Martin's work still impresses us with its silent vitality and profundity. I find that Linda and Ed's 'home' in Santa Fe and the 'micro-residence' program nurtured by Tatsuhiko and Hiroko both vibrate with 'life' expressed in a humble and steady rhythm. Like a subtly wavering shadow, it softly permeates my body and slowly breathes form into the individual lines which I draw onto paper.

中尾英恵「1本の線の中に内在するもの」より抜粋

ある対象をうつす
物の形や姿をうつす
万物を照らす太陽の光と影
…

これまで進藤が取り組んできた「映す／写す／移す」ことによって、こぼれ落ちるものたち。それは、大きな物語では語られない無数の小さな物語でもある。そのような小さなもの、微細なものの内に存在する、彩り豊かなグラデーションは、目を凝らさないと見えてこない、認識できないものである。並行して、長い時間をかけ、進藤は「風景や場に潜在的にあるもの」を捉えようと試みてきている。この「うつす」ことと「内在する」ものは、別々に独立して存在するのではなく、相互に影響を及ぼしあう関係性の中にあって、目に見えないレイヤーと微細なグラデーション、ときに隔たりを生み出している。

こぼれ落ちるもの、翻訳不可能性、内在するものへの関心は、白い紙に引かれる線による白であり黒であり、白でも黒でもない灰色の濃淡へと帰着した。進藤は、墨の濃淡、それ自体による光や影の表現の可能性に、「際限なくニュアンスに満ちた、〈色のない色〉、モノクロ、中性の状態や空間を示す「shimmer」[1]」を発見したのであろう。それは、「ドローイングそのものが影になりうるか」という問いでもある。1本の線、線のための線を引くことによって創られる対象物がなくなったこれらの作品では、様々な二項対立を超越し、ただ、その間に存在する無限のグラデーションだけが存在する。形態のない世界に溶け込むようにみえ入っていく行為は、母性や命のような長大なものに包まれる感覚を呼び起こす。光ではなく影への関心、それは、光は根源的な生と結びつくものであるが、進藤は、微細なニュアンスが織りなす静寂な影の中に、生身の生を見出しているのではないだろうか。…

Excerpt from "Things that Reside in A Line"
by Hanae Nakao

Tracing an object
Reflecting shapes and forms of objects
The sun shining above all things, its light and shadow
…

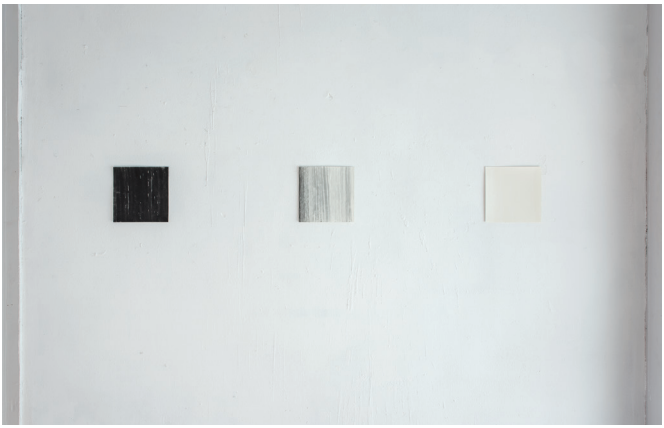
Shindo reflects on things that are lost in the process of 'reflecting/tracing/transferring.' That is, she reveals numerous small narratives which are often obscured in larger stories. Only by staring intently, can you perceive this subtle colorful gradation that exists in small, minute things. Along with this, Shindo has been working for a long time to capture 'something immanent that resides in landscapes and spaces.' These are not separate ventures; they are interrelated and thus create invisible layers and minute gradations, and sometimes disparities.

This interest in things lost in-between, untranslatability and something immanent that resides in things has led the artist to find expression in white gaps made by drawing black lines on white paper, and grey tonalities (not black, not white). She seems to have discovered "a 'shimmer'[1] that implies (colorless colors) with infinite nuance, monochrome tonality, and neutralized state or space" in gradations of sumi ink giving the effect of light and shade. Her work also raises a question: how drawings become shadows? In these works, made by drawing lines, thus lacking objects of creation, various dichotomies are overcome and what is shown to us is an infinite scale of shading that exists in-between. This invites us to enter a world of formlessness, which creates a sensation of being absorbed by a larger entity such as motherhood or life. The artist's interest in shade, while light is essential to life, suggests that she sees vivid existence in the silence of nuanced shadows. …

[1] Roland Barthes, *The Neutral: Lecture Course at the Collège de France (1977-1978)*. Trans. Rosalind E. Krauss and Denis Hollier. New York: Columbia University Press, 2005, 51.（進藤詩子訳、第2回表象文化論学会オンライン研究フォーラム2020配布資料 ／ Quoted from Shindo's handout given in her presentation at the 2nd online research forum of the Association for Studies of Culture and Representation, 2020.）

lengthening and…
sumi ink on paper, 253×253mm

Installation view, Youkobo Studio2



Phases, sumi ink, gofun pigment on paper, 134×134mm each

Still from Video Documentation

Meeting and Greeting Like Shadows

進 藤 詩 子　Utako Shindo

Residency: 2020.12.3 - 2021.2.28
Exhibition: 2021.2.17 - 2.27

Full texts by Linda Swanson and Nakao Hanae and
Video documentation are available at the exhibition webpage.

中尾氏とスワンソン氏の寄稿文の全文、
およびDouble Circle Tokyo制作の記録動画作品は展示特設ページに掲載。

https://www.utakoshindo.info/sp/exhibition2021/index.php

Brochure Design : Nanako Toyoizumi 豊泉奈々子　Edit. and Photo : Utako Shindo 進藤詩子
Photo of Artwork : Masaru Yanagiba 柳場大　Video Still : Susumu Miyazu 宮津将 (Double Circle Tokyo)
Translation : Tae Mizuno 水野妙 (en-jp), Michiyo Miyake 三宅美千代/UGUISU (jp-en)

Front cover image : winter sutra (detail), sumi ink on paper folded, 1000×1000×65mm

©Youkobo Art Space, Published February 2021　Youkobo Art Space, Tokyo　www.youkobo.co.jp

文化庁

youkobo ART SPACE